

林出賢次郎の生涯

——大本教と道院・紅卍字会との提携を仲介した外交官——

佐々 充 昭

はじめに

一九二一年に中国山東省の済南で道院という宗教団体が設立された。この団体は「扶乩」と呼ばれる一種の神懸かり自動書記術によつて神示を得て、道徳的な精神修養に励む道教系の新宗教団体である。そして、道院設立の翌年（一九二二年）に世界紅卍字会（以下、紅卍字会とする）という外郭団体が創設された。道院が内的な修養を行う団体であるのに対して、紅卍字会は外的な慈善活動を実践する団体であり、互いに切り離すことの出来ない表裏一体の組織として活動を展開した。

この道院・紅卍字会は、一九二三年に日本の大本教と提携関係を結んだ。大本教は開祖・出口なおの死後、娘婿の出口王仁三郎（以下、王仁三郎とする）が教団を大きく発展させていった。王仁三郎は、海外の様々な新宗教教団と提携関係を結びながら、積極的な海外布教を試みた。とりわけ一九二三年から始まった道院・紅卍字会との提携は最も長くかつ深いものであった。一九二九年から一九三〇年に三回にわたつて道院・紅卍字会から日本へ佈道団が派遣され、両者は「合同」ともいえるような関係となった^①。

そして、この両教団の橋渡しをしたのが、林出賢次郎（一八八二—一九七〇）であった。林出は日本外務省の外交官として中国に三〇年余り滞在した。彼はまた大本教の信者でもあり、一九二三年に大本教が道院・

紅卍字会と提携関係を持った際に、そのきっかけをつくつた人物であった^②。そして、両教団の提携を仲介する過程で、林出は自ら道院・紅卍字会に入会した。本稿では、林出賢次郎の生涯を辿りながら、林出が両教団の提携に際してどのような役割を果たしたのか考察する。

また、林出は満洲国が建国された後、「宮内府行走」に任命され、溥儀の通訳をつとめた。その傍らで道院・紅卍字会の活動にも積極的に関与し、日本人として道院・紅卍字会の最高幹部の一人となった。本稿では、戦後に林出が公開した回顧談などをもとに、満洲国在勤時代に林出が道院・紅卍字会でどのような活動を行ったのか明らかにする。

一、日野強の伊犁調査

林出賢次郎は大本教の信者であったが、林出が大本教と関わりを持つようになったのは、ある人物の影響によるものであった。その人物とは、陸軍きつての中国通として知られた日野強（一八六六—一九二〇）である。ここでは、日野強の経歴を辿りながら、日野が林出とどのようにして出会つたのか述べておこう^④。

日野強は一八六六年、現在の愛媛県小松町に生まれた。二〇歳の時である一八八六年に第一期生として陸軍士官学校に入学し、一八八九年に歩兵科を修了した後、陸軍歩兵少尉となった^⑤。その後、一九〇二年に

陸軍参謀本部に入り、これ以後、陸軍の諜報活動に従事した。一九〇三年三月には参謀本部の命令によって中朝国境付近の義州に派遣された。日露戦争に備えるために、朝鮮の義州を根拠地にして中国人の間諜を使いなから、ロシアの動静を探るのが目的であった。^⑦ 日野は、鴨緑江北岸地域におけるロシア人の軍事活動に関して種々の調査を行った後、同年一月に帰国した。そして、一九〇四年二月に日露戦争が勃発すると、陸軍歩兵少佐として第一軍司令部に所属し、寛甸・懷仁方面における敵情偵察の任務に就いた。^⑧

この時の調査をもとに、日野は一九〇五年に『北韓兵要地誌』を編纂した。^⑨ これは参謀本部の要請を受けて、ロシアの関連書を翻訳しながら北韓地方の軍事地誌を編纂したものであった。また、日露開戦直後である一九〇四年三月には『満洲土語案内』の編纂にも関わっている。本書は、「満洲ニ於ケル軍隊行動ノ便ニ資センガ為〔…〕主トシテ軍事的動作ニ必要ナル言語ヲ蒐集シ」たものであった。このように日野は諜報活動によく適合し、調査書の作成に長けていた。このような功績が認められ、一九〇五年六月には「勲勞成績顕著者」として参謀総長より表彰されている。^⑩ そして、同年一二月に少佐に進級して大隊長となった。

さらに翌一九〇六年七月に日野は参謀本部付けとなり、「その筋」から新疆視察の内命を受けた。^⑪ 新疆地方（現在の中国新疆ウイグル自治区）は乾隆帝の西征により清国領となったが、南下を望む帝政ロシアが、清国の弱化に應じて侵攻を企てていた。日野に下された探査の目的は、ロシアの南下に備えて、新疆地方の地誌民俗などあらゆる情報を収集することであった。

日野は一九〇六年九月七日に東京を発った後、同二〇日に北京に着いた。日野の記録によると、当時の北京公使館には付属武官として青木宣純大佐と坂西利八郎少佐が勤務しており、よき相談役として面倒をみて

くれたと記されている。^⑫ 青木と坂西は北京に特務機関を設けて諜報活動を行っていた。このことから、日野のいう「その筋」とは、日本の大陸進出を画策していた軍や政府の上層部のことであり、日野は彼らから新疆など中央アジアに関する情報収集を命じられたものと考えられる。

北京で調査旅行の準備を整えた後、日野は一〇月一三日に新疆へ向けて出発した。北京から保定、洛陽、西安、蘭州を経て甘肅省の河西回廊を通過し、中国本部の最西端である安西城から新疆に入ってハミに着き、トルファンから西北行して天山を越え、新疆の州都ウルムチに到着した。ところで日野はウルムチに着く直前に、天山山中で日本人に出会っている。それがまさに林出賢次郎であった。^⑬ これに関しては、また次節で詳述する。

林出と別れた後、日野はウルムチからマナスを経てクルカラウスに至り、そこから北方タルバグタイへの道を往復したのち西行して、目的地である伊犁七城に到着した。そこで任務を達成した後、復路は東南に方向を転じて、北から南へ再度天山を越え、カラシャールに達してふたたび西行し、クチャ、アクス、カシユガルを通過してヤルカンドに至った。そこからさらに南下し、カラコルムを越えてインドに入り、カルカッタから船に乗って神戸に入港し、京都に立寄って一九〇七年一二月二五日に東京へ戻ってきた。^⑭

こうして約一年半に及ぶ大旅行を終えた日野は、翌年（一九〇八年）に詳細な調査報告書を作成した。この時、明治天皇から召されて御前講演を行い、旅の概要について語っている。なお、日野の調査報告書は、一九〇九年五月に博文館から『伊犁紀行』二巻として公刊された。軍事機密に属するこの種の報告書が一般向けに公刊されることは異例なことだった。これらの活動が認められ、日野は一九〇九年六月中佐に昇進し、近衛歩兵第二連隊附となった。

その後、一九一一年に中国で辛亥革命が起こり、翌年（一九一二年）南京に中華民国臨時政府が樹立されて清朝が滅びた。そして同年三月に袁世凱が中華民国臨時大總統に就任すると、日野は六月八日付で「陝西省方面ニ到リ諜報活動ニ勤務シ、特ニ該方面ニ於ケル共和政反對党ノ動静ヲ偵知」せよとの命を受けて、再び中国に渡り、陝西巡撫升允ら宗社党の動向を偵察した。そして翌一九一三年六月に帰国している。

日本に帰国後、日野は大佐に昇進したが、すぐに予備役に編入され、軍を退役した。その後は、山東省の青島に居住して缶詰業や煉瓦製造会社を経営した。一九一四年に第一次大戦が勃発すると、日本軍占領下の青島で、日野は宗社党や革命派の人士と交流しながら情報収集活動を行つた。そして、一九一九年に「青島還付問題」が起こると、日野は在留邦人を代表して陳情委員長を任され日本に帰国した。しかし、それっきり家族にも所在がわからなくなつてしまった。

家族が心配していたところ、日野は大本教の本部のある綾部に行つていた。当時、『実業之日本』社の理事をつとめ、財界で名が知られていた栗原白嶺が、突然、退社の辞「天の命ずる人の道に向かつて」（『実業之日本』大正八年七月号）を発表し、引退と大本教入信を公表した。これを読んだ日野は大本教に関心をもち、大本教の本部を訪れたのである。日野は綾部で王仁三郎と面会し、感ずるところがあり、秋に青島に帰るなり俗世間と一切縁を切つて大本教に入信し、綾部に移住した。

大本教では参議として王仁三郎の側に仕え、中央アジアでの探検の知識や体験を伝えた。しかし、日野は一九一九年頃に肺結核を患つて健康を害し、一九二〇年一月二三日に波瀾万丈の人生を終えた。享年五四歳であった。『東亜先覚志士記伝』には、「日野は」大本教の教旨に共鳴し、青島における事業を抛つて丹波綾部に帰住し、大本教の幹部として更に新生涯に入ったのであったが、大正九年綾部において長逝した」と

記されている。

日野と大本教との関わりは非常に短いものであった。しかし、日野が綾部の大本教本部に移住して王仁三郎と直接交流したという事実は重要である。日野は陸軍きつての大陸通で、当時世界的な評価を受けるほどの地図やレポートを作成した人物である。王仁三郎は一九二四年に蒙古入りして世間を驚かせたことがあるが、綾部滞在中に日野は新疆旅行のさまざまな体験や貴重な資料・地図等を王仁三郎に見せたはずであり、王仁三郎が蒙古入りを思い付く上で大きな刺激を与えたと考えられる。

また王仁三郎は一九二〇年代に宗社党との関係を深め、宣統帝を擁立する復辟運動を画策しながら満蒙地域の独立運動に関与している。日野は一九一二年から翌年にかけて陝西省で行つた升允ら宗社党の動向に関する調査や、その後の青島における活動で得られた情報を王仁三郎に惜しみなく語つたはずである。また、日野と大本教との関係で重要なのは、日野の次女が林出賢次郎と結婚したことである。これがきっかけとなつて、林出は大本教に入信することになった。以下では、林出の経歴を辿りながら、彼がどのようにして日野と出会い、さらに大本教に入信していったのか考察してみたい。

二、林出賢次郎の伊犁調査

林出賢次郎は一八八二年和歌山県に生まれ、一三歳の時に御坊市湯川町の林出精一の養子として入籍した。南方熊楠も出た和歌山県立第一中学校を一九〇一年に首席で卒業したが、養父母の許可が得られず進学を断念し、一年ほど紀三井寺の高等小学校の代用教員となった。学校の宿直室に寝起きして、夜明け前に紀三井寺の観音様に参詣するのを日課としたという。これ以後、林出は生涯にわたって観音を信仰するようになって

た。また、林出の宗教に対する関心はこの頃に芽生えた。

しかし、青雲の志を捨てきれない林出は、和歌山県から唯一人の県費留学生に選ばれて、二十歳の時である一九〇二年に、上海の東亜同文書院に二期生として入学した。東亜同文書院は日本の大陸政策の一環として、近衛篤磨が会長をつとめる東亜同文会が一九〇一年に設立した専門学校である。林出は一九〇五年三月に同校を卒業した。ちょうどその時は日露戦争の真最中であり、日英同盟を結んでいた日本は、イギリスと共同で清露国境におけるロシアの活動状況を調査することになった。そしてイギリスはすでに新疆内のカシユガルに領事館を置いていたので、それより以北の調査を日本が担当することになった。

当時、東亜同文書院の院長であった根津一は、この任務を遂行する人物を選定するように外務省から依頼を受けた。ちょうどその時、第二期の卒業生が輩出され、そのなかに林出がいた。林出は、草政吉、三浦稔、桜井好孝、石井久次とともに上海から帰国するや、その足で京都伏見桃山に療養中であった根津院長を訪ねた。そして新疆調査の話を聞くと、林出、草、三浦、桜井ら四人は、その場で承諾した。しかし、石井だけはどうしても従軍の初志を変えず断ったので、あとで波多野養作が加わった²⁴。

こうして、林出は伊犁、草は烏里雅蘇台、三浦は庫倫（現在のウランバートル）、桜井は布多科、波多野は迪化（ウルムチ）を調査することになった²⁵。コースの相談をする中で、林出は誰も希望しなかった最も遠い伊犁行を引き受けた。こうして林出は外務省の囑託として「清国新疆省露清国境伊犁地方調査」を命じられ、西域調査の旅に出た。名前を「林慕勝」と変え、中国服に辮髪姿で清国人に変装した林出は、漢人と蒙古人の従者を従えて、ラクダでゴビ砂漠を渡り、天山山脈を越えて新疆のウルムチから伊犁に入り、七ヶ月におよぶ大旅行を行った²⁶。

中国へ渡った林出は一九〇五年七月に北京を発ち、山西省の太原から潼関を経て西安に至り、西安から甘肅省の蘭州に着いた。しかし、道中で痔を病み、蘭州で約一ヶ月宣教師の福音堂病院に入院して手術をした。この時、蘭州の道台（県知事や府知事に相当）をつとめていた王樹柟（王晋卿）という役人に、外国人登録証や滞在手続きの關係で頻繁に会っているうちに、林出はとても気に入られた²⁷。そして、ここで結んだ彼との縁が林出の人生に大きな影響を及ぼすことになるのである。

その後、林出は万里の長城の西端・嘉峪関を過ぎて、甘肅省の安西に到着し、さらに新疆省に入ってゴビ砂漠を縦断し、一九〇六年一月に哈密に到着した。そこから天山南路を西に向かつて吐魯蕃を経由し、さらに天山を北に越えて新疆の迪化に辿り着いた。その後、天山北路を通って伊犁に向かい、四月に最終目的地である伊犁の首府綏定城に到着した。世界の險山といわれる天山北路を含む大旅行であり、林出はシルクロードを通って伊犁まで行った最初の日本人となった。

林出は伊犁の首府綏定城を拠点として約五ヶ月間滞在した。その間、与えられた任務に関する調査を進めたが、伊犁の府知事・汪步端が非常な客好きで優遇を受けた。また、彼が日本人であると聞きつけて、会いたいと言ってきた者が出てきた。近くの吐爾扈特郡の王である。この老王の息子である巴爾塔が、当時、日本で佐々木蒙古王と言われて有名だった、佐々木安五郎代議士の世話になって勉強していた。息子が日本へ行っているが、日本がどんな国か分からない。ぜひ日本人に会ってみたいというのである²⁸。

吐爾扈特王と林出は一見して親しくなった。老王は林出に、自分の施政地である烏蘇に来るように誘った。その場所は、伊犁と迪化の中間の地方にあり、そこに行くには天山山脈を越えて行かねばならなかった。林出は四昼夜をかけて天山山脈を越え、烏蘇に到着した。林出は烏蘇の

王府内に住まい、王府中の歓待を受けながら二カ月を過ぎた。²⁸⁾

そして一九〇六年末、新任の伊犁將軍を出迎えるため、吐爾扈特王が迪化に行くことになり、林出も同行した。迪化に到着すると、蘭州で世話になった王樹枬道台が布政使として着任していた。彼は当時、中国屈指の学者であったが、西太后のお気に入り、非常な栄進で新疆省布政使となり、迪化に着任してきたのである。布政使は新疆省における文官の最高官であり、役人の任免権から全省の財政を掌握していた。それから約二ヶ月間、林出は王樹枬のところに身を寄せ、手厚い保護を受けながら親密な交流をした。

王樹枬はとくに教育に熱心で、迪化に法政学堂(官吏養成所)と陸軍小学堂(陸軍士官学校)の建設を計画し、林出に両学堂の教習(教授に相当)になつてほしいと要請した。林出はこの申し出を断り切れず、「無学の自分はその任でないと思うが、もし先生が私を弟子として教えを賜るならばお引き受け致します。そのため一度帰国して了解を得て参ります」と約束した。²⁹⁾

こうして林出は二年間の滞在を終え、一九〇七年二月に帰国の途に着いた。林出はトルキスタン人の従者と護衛二騎を従えて迪化を出発し、北京に向つた。その途中、新疆の迪化にいよいよ入ろうという天山山中の砂漠で、アンペラで天蓋を作つた幌馬車が二台、林出の馬とすれ違つた。林出は怪訝に思つて、騎兵の一人を見に行かせると、ほどなく手に小さい紙片を持つて戻つてきた。それは手帳を破つた紙で、中国人には分からないように片仮名の文字で、「リクゲン・シヨウサ・ヒノ・オメニカカリタシ」と書いてあつた。先に述べたように、日野は特命を帯びて伊犁で調査を行うことになつたが、現地向かう途中で林出にばつたり出会つたのである。林出は二年ぶりに日本人と出会つた嬉しさで、大急ぎで幌馬車の所に駆けつけた。その後、林出は再び迪化に引き返して日

野と数日の間、懇談した。林出は日野に多くの要人を紹介して便宜を図り、西域新疆事情を伝えた後、あらためて帰国の途に就いた。

日本に帰国した林出は外務省に詳細な報告書を提出した。³⁰⁾そして、教習の件を持ち出したところ、外務省から許可が下りた。こうして林出は、王樹枬布政使との約束を果たすために一九〇七年に休む間もなく中国へ渡り、再び天山を越えて迪化(ウルムチ)に到着した。そして一九〇八年二月に法政学堂と陸軍小学堂の教習に就任した。また、前約通りに、林出は正式に王樹枬のもとに弟子入りし、毎夜古文の講義を受けた。その間、林出は懐かしの烏蘇に吐爾扈特王を訪ねて旧交を温めている。

そうこうするうちに契約期間の二年となり、一九一〇年三月に林出は教習の職を辞任し、王樹枬の引きとめを辞して迪化を後にし、日本へ帰国した。³¹⁾なお、この二回目の新疆滞在期間中に、王樹枬は新疆省通志の編纂にとりかかつていた。それらがまとめられて一九一一年に新疆省通志が『新疆図誌』全一・一六巻として完成した。林出は「郷土志」の鈔本を手入れし、そのうちの三〇種、それに全省図説一種(合計三二種、三二冊)を日本に持ち帰っている。³²⁾

三、大本教と道院・紅十字会の提携仲介

林出は新疆伊犁での調査を終えた後、中国在勤の外務省通訳生として正式に採用された。それ以来、北京・奉天・上海・南京・漢口など中国各地に赴任しながら、三十年余り外交官として活躍した(表1参照)。

表 1：林出賢次郎の略歴

年	年齢	事項
1882	－	8月22日和歌山県にて父津村長次郎、母テルの二男として誕生
1895	13	林出精一の養子となる。寂しさから観音信仰をもつ。
1902	20	県費留学生として上海の東亜同文書院に入学
1905	23	同校の第二期生として卒業、外務省嘱託として清国新疆省露清国境伊犁地方調査を命ぜられる。
1905.7 ～ 1907.5	23 ～ 25	天山を越え廸化(ウルムチ)を経て伊犁に至り5ヶ月間の滞在調査を行う。帰途、日野強と砂漠の中で遭遇
1907.10 ～ 1910.7	25 ～ 28	外務通訳生として第2回目の新疆旅行。王樹柟布政使のもとで廸化にある法政学堂と陸軍小学堂の教習に就任
1912	30	外務通訳生として北京公使館勤務
1913	31	奉天に転勤
1916	34	外務書記生に任命、叙勲八等瑞宝章
1917	35	上海に転勤
1920	38	上海総領事館副領事、叙高等官七等、叙従七位、叙勲七等瑞宝章
1921	39	東京に転勤、外務理事官、外務省情報部第一課、叙勲六等瑞宝章
1922	40	山東懸案解決に関する共同委員会委員随員として北京に出張、叙高等官六等、叙正七位
1923	41	南京に転勤、南京総領事館領事、叙単光旭日章
1925	43	北京公使館一等通訳官、叙高等官五等、叙従六位
1926	44	中国の治外法権に関する委員会に委員随員を命じられ北京へ出張、英国出張、ヨーロッパ視察調査、ジュネーブ国際連盟総会帝国代表者随員、米国視察調査、叙勲五等瑞宝章
1929	47	漢口総領事館領事、公使館二等書記官、上海に勤務、叙高等官四等、正六位
1932	50	国際連盟支那調査委員会参与随員、満洲派遣特命全権大使随員、奉天総領事館領事、大使館二等書記官、新京に在勤
1933	51	在官兼任のまま満洲国執政府「行走」に聘せられる。
1934	52	満洲国宮内府「行走」に任命
1935	53	満洲国皇帝陛下御訪日扈従員、叙雙光旭日章
1936	54	叙勲四等瑞宝章
1936	54	満洲国新京大使館一等書記官、叙高等官三等
1938	56	満洲国宮内府「行走」解任、北京大使館に転勤
1940	58	叙正五位
1941	59	北京大使館参事官、叙高等官二等、依願免本官、特旨を以て叙従四位
1941	59	東亜同文書院大学校学生監、上海へ赴任
1943	61	宮内省式部職御用掛被仰付(勅任待遇)、大東亜省嘱託、外務省書記生試験臨時委員
1945	63	敗戦に伴う職制変革宮内省御用掛被仰付(勅任待遇)
1948	66	東京を引き揚げ郷里に戻る。

(典拠：「林出賢次郎小史」『東方君子：尋賢林出賢次郎翁を偲ぶ草々』林出翁をしのぶ会編集兼発行、1973年、183～193頁。「林出賢次郎関係文書」旧蔵者履歴〔<https://rnavi.ndl.go.jp/kensei/entry/hayashidekennjiroul.php>〕を参照)

その間、林出は大本教の信者となった。先に述べたように、林出は伊犁での調査を終えて日本へ帰国する途中、天山山中の砂漠で日野強少佐と出会った。この夜、林出はウルムチに戻って日野と親交を温め、両者はすっかり意気投合した。日野には二人の娘がいたが、林出に「娘をもらってくださらんか」と申し出た。すると、林出も「ええ、ぜひください」と言って、その場で結婚を決めてしまった。林出は日本に帰ると、弁髪のまま中国人風の姿で日野家を訪れ、日野の留守家族を仰天させた。しかし娘はまだ十五、六歳という少女だったので、数年間待たなければならなかった。後に、この姉妹のうち妹のカヨの方が、一九一二年に林出と結婚したのである。⁵⁵

その後、日野は大佐で退役し、一九一九年頃に大本教に入信して王仁三郎の顧問となった。その関係から、林出は夫人と共に一九二〇年に大本教に入信した。⁵⁶ 林出が大本教と関わりを持ったのは、ちょうど林出の従兄弟にあたる上西信助が大本教の財務局長をつとめていたことも大きく関係したと考えられる。⁵⁷

こうして大本教の信者となった林出は、中国駐在外交官として仕事をする中で道院・紅卍字会に入会した。そのきっかけとなったのが、一九二三（大正一二）年九月一日に発生した関東大震災である。戦後、林出はその時のことを述懐した回顧談を発表している。⁵⁸ その内容を要約すると、次のとおりである。

関東大震災が発生すると、中国の道院では扶乩の壇において「二八万斤（約二万石）の白米と義捐金一万円を日本に送れ」という命令が下された。この神示を受けて、北京の紅卍字会中華総会は、米の産地である紅卍字会南京分会にその買入を命じた。しかし、当時は中国で防穀令が布告されており、米の輸出ができなかった。ところで当時、林出は日本外務省の書記官として南京領事館に勤務しており、地元の中国人名士と親

交があった。そのために林出にこれを贈呈してその個人的所有物とした上で、日本へ輸出することにした。林出は日本人だから防穀令の制約を受けなかったからである。

こうして二八万斤の白米が林出に贈られた。林出はすぐに日清汽船会社の船をチャーターして白米を日本に送り、震災の被災者救援に役立てた。この時、林出は道院・紅卍字会の存在を初めて知った。そして、南京弁護士会の会長にして紅卍字会南京分会会長でもあった陶道開の紹介により、林出自身も道院・紅卍字会に入会し、扶乩により「尋賢」という道名が与えられた。

そしてまた、紅卍字会中華総会では慰問使節員を日本へ派遣することにした。これに関しては、林出が日本の外務省に詳細な報告を行っている。その中に、林出が一九二三（大正一二）年一〇月八日に外務大臣宛に送った報告書がある。⁵⁹ その内容を要約すると次のとおりである。

関東大震災が発生すると、北京にある世界紅卍字会中華総会から救恤米二千担を日本に寄送することになった。江蘇省の督軍および省長の特別許可を得て、米二千担を購入し、林出に「一袋百四十斤入二千袋」を交付した。そして江蘇省の税関において東京震災救護局宛輸出手続を終了し、上海を経由して神戸へ輸送した。北京にある紅卍字会中華総会の会員中には王士珍、王芝祥、江朝宗らがあり、南京においても齊督軍、韓省長、宮鎮守使、および葉総商會会長をはじめとする官民の有力な信者が多く、浙江の督辦・盧永祥、上海の護軍使・何豊林らもまた紅卍字会の会員であった。今回、江蘇省と浙江省の両省間で和平協定が結ばれたが、それも紅卍字会の信者が、その宗旨とする和平促進の信条を実現するために成立したものであった。

また救恤米の発送とともに、紅卍字会中華総会の代表として侯延爽、楊承謨、馮閔謨の三名を派遣して、災害状況を視察させることとなった。

今回日本に派遣された三代表は、いずれも日本留学生出身で、災害視察を兼ねて紅卍字会の宗旨を宣伝し、さらに日本にも道院を設けて日中の和平親善を図ろうとした。^④

林出の報告書には、概ね以上のようなことが記されている。そして報告書の最後に『世界紅卍字会大綱暨施行細目』の原本（中国語）と「世界紅卍字大綱暨施行細目訳文」（大正十三年十一月拾日記録係接受）、および「在南京領事官林出賢次郎から日本外務省出淵局長宛書簡」が付されていた。その中で、林出が出淵局長に宛てた書簡には、紅卍字会代表者らが日本に渡って上京した際、外務省当局でよく取り計らってほしいという内容が記されていた。その書簡を引用すると、次のとおりである。

右団体〔道院・紅卍字会を指す…引用者〕ハ世界宗教統一ノ大理想ヲ有シ、靈学研究會宗教研究會等ノ機関ヲ設ケ多クノ信者ヲ有シ、目下盛シニ信者ヲ増加シツツ、平和運動ト慈善事業ニ努力シツツアル団体ニシテ〔…〕同団体ニテハ救災米ヲ日本ニ送ルト同時ニ、同団体ノ北京本部ヨリ代表三名ヲ日本ニ派遣シ、該団体ノ主旨ヲ日本ニ伝ヘ賛成者ヲ得度キ希望ナル趣ニテ、代表中二名ハ天津ヨリ直接渡日シ、内一人侯延爽君小官ヲ来訪シ、輸出米ニ関スル手続上ノ打合せヲ為セル際、日本内地ニ於ケル知人ニ紹介ヲ希望セラレ候ニ付、不取敢閣下ニ御紹介申上候間、参上ノ際ハ右ノ御含ミヲ御面会ヲ賜ハリ度、尚ホ今春東京ニ成立セシ靈学研究會員ノ誰カニ御紹介ヲ賜ラハ、東京ノ大学教授其他各宗派ノ名士入会致居ルモノ少ナカラス、姉崎博士ヤ大本教ニテ名高キ浅野和三郎氏等モアリシ様承知致居候、又該研究會員御不明ノ様ニ候ハバ、御知人中宗教上趣味ヲ有スル方ニ御引合セテ賜ハリ度、先ハ右侯君御紹介迄如斯御座候敬具^④

なお、この書簡の中で紹介されている三名の慰問派遣員のうち、侯延爽（道名・素爽）は清末に日本の政法大学に留学した経験を持ち、裕福な家柄のキリスト教信者であり、中国銀行のハルビン支店長や税関長などを歴任した人物である。^④ この書簡によると、日本の知人を紹介してもらうために、侯延爽は日本へ渡る前にわざわざ林出のもとを訪れているが、彼がこのような依頼をしたのは道院・紅卍字会の宣伝と普及が目的であったと考えられる。これを受けて、林出は日本外務省の出淵局長を訪ねるように侯延爽に勧め、その旨を出淵局長に知らせるためにこの書簡を書いたのであった。

この書簡に記されているとおり、ちょうどこの年（一九二三年）の三月に東京で心霊科学研究会が結成されていた（この報告書には「靈学研究會」と記されているが、同一のものを指していると考えられる）。そこで林出は、侯延爽を心霊科学研究会の会員である姉崎正治（東京帝国大学文科大学に宗教学講座を開設した教授、日本における宗教学の基礎を築いた人物）や浅野和三郎に紹介してほしいと依頼したのである。なお、ここで浅野和三郎の名前が出ている点に注目したい。浅野は海軍機関学校の英語教師であったが、鎮魂帰神法に興味を持ち、一九一五年に大本教に入信した。^④ その後、一九二一年の第一次大本事件を機に教団を離れ、当時イギリスで隆盛していた「心霊主義（spiritualism）」の影響を受けて、一九二三年三月に心霊科学研究会を創設した。

以上のことから、侯延爽が日本を訪問する以前の段階で、林出が道院・紅卍字会の交流先として大本教を念頭に入れていたことがうかがえる。これに関して、孫江は、中国第二歴史檔案館所蔵の紅卍字会関係資料をもとに、林出が関東大震災発生後、大本教と紅卍字会を結びつけるために頻繁に紅卍字会南京分会を訪問した事実を明らかにしている。^④

また、日本に到着してからの使節員一行の動向は、林出が作成した別

の報告書にも詳しく記されている。それには次のように記されている。

当時私信ヲ以テ出淵重細重局長ニ対シ該代表者等登省セシ場合ニハ、前年東京ニ於テ大学教授各派宗家及学者等有志ヨリ成立セル靈学研究会ノ会員ニ紹介シテ、宗教上ノ意見ノ交換ヲ為サシムル様御尽力方御依頼申上ゲ、又前上海篠崎病院長ニシテ現今東京芝三田ニ居住スル篠崎都香佐氏ニ該代表者ヲ紹介シ、篠崎氏及山岡海軍中将等ノ有志ヨリ成ル神学会ニ於テ該代表ト意見ヲ交換セラレンコトヲ依頼シ、更ニ小官ノ知人ヲ通シテ該代表者等ヲ京都府下綾部ナル大本本部ニモ紹介致置候、然ルニ代表侯延爽氏等東京滞在ノ日子ノ少ナカリシ關係モアリ、僅カニ篠崎氏ノ紹介ニテ右神学会ノ一員ニテ天理教信者タル山口文学士ト半日意見ノ交換ヲ為シタルノミニテ其俣神戸ニ引返シ来リ、一度大和ノ天理教本部ヲ訪ヒシ模様ナルモ多ク得ル所ナカリシモノノ如ク、斯クテ大本本部ヲ訪フニ及ビ互ニ其教義ヲ信スルニ至リ直チニ神戸ニ道院ヲ開設セントノ議纏リ⁴⁶

この報告書から、林出が侯延爽に、心霊科学研究会の会員のほかにも、前上海篠崎病院長らが組織した神学会や大本教を紹介したことがわかる。そして、侯延爽は神学会会員の紹介を通じて天理教を訪問したが意に合わず、大本教を訪問して大きな成果を得たとされている。

実際、侯延爽は義捐金を東京震災復興局に届けた後、大本教の綾部本部を訪問し、教主の王仁三郎と面会した。その時、初対面であるにもかかわらず、道院の教えと大本教の教理は根本的に同じであるとして、両者は互いに意気投合した。これが契機となつて、「大本教モ近ク北京ニ布教師ヲ送り、世界紅卍字会ノ援助ヲ得テ大宣伝ノ計画ヲ立テ、世界紅卍字会モ大本教ト提携シテ神戸ヲ根拠トシ布教スル」という約束が成立し

た。⁴⁷そして、大本教きつての中国通で中国語に堪能であった北村隆光が中国へ派遣され、済南母院にて道院・紅卍字会に入会した。その後、侯延爽と北村隆光（道名・尋宗）の尽力によって、翌一九二四年三月神戸に日本最初の道院（神戸道院）が開設された。以上のように、道院・紅卍字会の慰問使節員を大本教に紹介し、両教団の提携を仲介した人物が、まさに林出賢次郎であったのである。

また林出は、中国駐在外交官としての地位を利用して、中国における大本教の宣教活動に様々な便宜を図った。例えば、一九三二年一月に上海事変が勃発すると、大本教の外郭団体である人類愛善会の東洋本部では同年二月二八日に東島威之吉らを慰問使として派遣した。当時、東島威之吉は海軍大佐であったが、大本教の信者でもあった。そして一九三四年には満洲国の大本教支部で「満洲辯理心得」の役職についている。⁴⁸ちょうどその時、林出は現地の上海公使館で二等書記官として勤務しており、林出の案内で東島ら人類愛善会東洋本部の慰問使一行は、軍病院や居留民各団体等を慰問した。

また、東島ら慰問使一行はこの時、上海にある道院・紅卍字会を訪問した。⁴⁹東島は道院・紅卍字会にも入会しており、一九三〇年頃には東京方面の道院における神位取扱者に任命されている。⁵⁰このことからわかるとおり、東島は道院・紅卍字会との交流活動を積極的に行っていた。そして、東島が上海の道院・紅卍字会を訪れた際、「日本の軍部当局者が紅卍字会に対して良い理解をもっていないために死体の埋没や収容などの活動が思うまま出来ない。特に通行証が無い」ことを聞いた。⁵¹そこで東島は、林出に紅卍字会の要望を充たすように要請した。これを受けて、林出は日本軍と折衝して、東南紅卍字会聯合救済第一隊が戦区にて兵民の救済を実施できるように「軍事長官の諒解を得て空陸海軍の聯合布告をたのみ（…）陸軍より紅卍字会に対して通行証を下附」してもらうな

どの便宜を図っている。⁵²⁾

四、満洲国勤務時代における道院・紅十字会との関わり

一九三〇年代に入ると、林出は満洲国の大使館に転勤となった。一九三二年三月に満洲国が建国されると、続く九月一五日に日本は満洲国を承認するために新京で日満議定書の調印式を行った。この時、林出は上海の領事館に勤務していたが、日本側の特命全権大使である武藤信義陸軍大將の随員に選ばれ、通訳の仕事を担当した。これを機に、林出は一九三二年六月に上海から奉天の領事館へ転任し、同年一〇月に新京の駐満日本大使館二等書記官に任ぜられた。

なお、満洲国勤務時代においても林出は大本教と緊密な関係を維持していた。林出は一九二九年に家族を上海に呼び寄せたが、一九三二年一月に上海事変が起こると、戦火を避けるために、同年二月に家族を大本教本部のある京都府綾部の日野家在所に避難させている。また大本教の機関誌をみると、一九三二年七月二日の条に、「信者林出賢次郎氏今回奉天領事に榮転し挨拶に来院、満洲別院に来院した」という記事が掲載されている。⁵³⁾ その後も、林出は一九三五年一月に人類愛善会満洲本部顧問に任命されている。⁵⁴⁾ このことから、林出が満洲国勤務時代に大本教の信者として活動していたことが確認できる。

さらに林出は一九三三年一月に満洲国執政府の「行走」に聘せられ、溥儀の通訳をとつめる秘書となった(翌年に満洲国の帝制実施によって「宮内府行走」となる)。「行走」というのは清朝の官名で「出向者」を意味し、宮中に自由に出入りできる身分の高い者に与えられた。また同年二月には関東軍司令部事務嘱託にも任命され、無給ではあるが兼務のまま関東軍通訳の資格も得た。

溥儀の通訳になるにあたって、林出のそれまでの経験が大いに役立った。二度にわたる新疆調査の際に、林出は布政使の王樹枏から清朝の宮廷言葉を伝授された。林出が日満議定書の調印式で通訳にあたった時、溥儀は流暢に清朝の宮廷言葉をあやつる林出に注目した。二人は調印式のあと言葉を交わす機会があった。その際、話題が宗教の話になり、両者には共通の信仰があることもわかった。⁵⁵⁾

二人が初めて出会ったとき溥儀は二六歳、林出は五〇歳という親子ほどの年齢差があったが、溥儀は林出をいつも「林出^{リツシュウ}」とよんで親愛の情を示した。溥儀は、ふとした思いつきがひらめいたときや、意になつた書が仕上がったときなど、時を構わず林出を宮廷に召し、反応を知りたがった。そのために林出は通訳の仕事とは別に、昼夜の別なく待機して溥儀に仕える生活を送った。また、天皇の名代として秩父宮が満洲国の建国を慶賀するために訪満した際や、溥儀の日本訪問など日満親善の檜舞台における通訳は、いつも林出が担当した。⁵⁶⁾

林出はその語学力と円満な人柄により、関東軍、國務院、宮内府、大使館など日本人官吏の間でも人望を得ていた。溥儀とこれらの役所間の連絡調整役として、林出は不可欠な人材となっていた。林出の仕事ぶりに対して、日本外務省の資料には次のように報告されている。

大使館二等書記官林出賢次郎同官ノ支那語ノ程度ニ関シテハ今更特ニ茲ニ絮説ヲ要セサルカ、同官ハ当大使館開設以來専ラ当館支那語關係事務ヲ主管シ、歴代関東軍司令官ノ重要ナル通訳事務ヲモ担当スルト共ニ、満洲国皇帝陛下ノ特別ナル御親任ヲ得「宮内府行走」ノ待遇ノ下ニ、陛下ト歴代大使トノ会谈ハ同官ニ依リテノミ担任セラレ居レルノミナラス、宮内府内外諸儀式ノ際ノ勅語乃至奉答ハ、帝政実施以來同官一人ニテ担当シ居ル外、陛下ニ対スル軍事、外交、

法律、経済等各般ニ亘ル御進講ノ通訳ヨリ、拝謁者トノ御会談等綜テ同官一人ニテ担当シ来レル実情ニテ、真ニ日滿両国間ノ契子トナリ、滿洲国側トノ公私両方面ノ交際場裡ニ活動シ、非常ナル多忙裡ニ努力ヲ続ケ居レルト共ニ、昭和九年六月以来今日迄三年余ニ亘リ、当館員ニ対シ支那語講習ヲ与へ来レル一方、家庭ニ於テハ尚支那語古文ノ研究ニ北京人支那語教師ヲ招聘シテ研鑽怠ラサル有様ナリ

当時、溥儀は日本人に対して懐疑的で不信感を持っていたとされるが、その中であつて林出は溥儀の公私にわたる通訳として信頼を得、林出は「行走」在任中、溥儀あるところに必ず影のように付き添つた。一九三五年に皇帝溥儀が日本皇室を訪問した際にも、林出は二六日間に及ぶ全旅行期間中、皇帝の側近として通訳の任務を遂行した。その一年後に「訪日宣詔一周年」を記念して、この時の訪日記録を本にして出版している。本書は「当時側近に奉仕したる駐滿日本大使館二等書記官、滿洲国宮内府行走林出賢次郎氏に請うて本書を編み、日滿両文を以て印刷に附し滿洲国内にこれを頒ち」たものであつた。

その一方で、林出は、溥儀の通訳の活動を通じて得た滿洲国に関する情報を極秘裏に日本の外務省に送つていた。それらは、滿洲国の日本大使館が林出に命じて、外務省の外務大臣、次官、東亜局長の三名に限つて送り続けた溥儀と関東軍の動静をさぐる諜報文書であつた。現在、これらの資料は『厳秘会見録』として日本に残されている。

『厳秘会見録』の記録は、一九三二年一月に始まり一九三八年四月に至る、五年五ヶ月にわたるものである。そこには、滿洲国の皇帝溥儀と会見した日滿両国の大臣・大使・軍人等とのやりとりが、会話形式で活き活きと記録されている。このように林出は、溥儀の専属通訳という地位を利用しながら、日本外務省の諜報活動にも従事していたのである。

しかし、このような林出の秘密行為は関東軍参謀長・東条英機の知る所となり、「宮内府行走」という職責は滿洲国の官制上存在しないという理由で、一九三九年一月正式に溥儀の通訳を解任され、大使館の書記官としての仕事のみに限られた。それ以来、この極秘記録は和歌山県御坊市の土蔵の中に五〇年間厳重に保管されてきた。そして息子の賢三氏が父の死後、遺品整理の時にその存在を知り、この資料が世に出ることとなつた。

林出は、滿洲国在勤中にも道院・紅卍字会の活動に精力的に関わつた。滿洲国への転任後、溥儀の専属通訳として幅広い人脈を有した林出は、道院・紅卍字会に対する支援を積極的に行つた。例えば、滿洲国内で戦渦が発生した場合、林出は関東軍と交渉して、紅卍字会員の通行許可証を発行させるなどの便宜を図つている。このような貢献が認められ、林出は道院では北京総院の名譽統掌、また紅卍字会では中華總會の名譽會長や滿洲国総会の首席維護會長などの要職に任ぜられ、道院・紅卍字会の最高幹部の一人となつた。また、一九三五年に朝鮮の京城に朝鮮道院（朝鮮主院）が開院されたが、林出は道院・紅卍字会の幹部として朝鮮道院の設立に尽力し、朝鮮道院（朝鮮主院）の最高職位である「道慈統監」に任命されている。

林出が道院・紅卍字会で大きな信頼を得ていたことを物語る象徴的な出来事があつた。一九三七年五月に紅卍字会滿洲総会が開かれた際、扶乩による老祖の神命によつて、滿洲国内の全信徒の中から、中央部に六人と地方の五地区にそれぞれ六人ずつの計三十六人が選ばれ、道院で最も位階の高い「授靈玄真行修応化一靈宗主」の称号が授けられた。その際、林出は、馬龍潭（元東北鎮守使陸軍中將）、商衍瀛（宮内府内務処長）、張海鵬（侍従武官長）、張景恵（國務大臣）、于芷山（治安部大臣）の五人の滿洲

国大官と共に中央の「宗主」に選ばれ、紅卍字会満洲国総会首席維護会長に任命された⁶⁶。日本人の修方（道院の信徒）に、このような道院の最高称号が授与されるのは、きわめて異例で破格的な扱いであったといえよう。

林出が道院・紅卍字会の最高幹部として活動していたことは、溥儀もよく知っていた。そればかりでなく、溥儀自身、道院・紅卍字会に大きな関心を寄せた。これに関して、林出は終戦後に、当時の回顧談を公開している。それによると、皇帝溥儀は「道院世界紅卍字会の修方として浩然と道名を賜り、ときどき手許金を世界紅卍字会に下付して紅卍字会の慈善事業に援助協力せられたが、当時これは御思召により公表せぬことにしていた⁶⁷」と述べている。林出が溥儀の信頼する通訳者として、常に溥儀と行動を共にしていたことを考えると、信憑性のある証言であると思われる。これに関して林出は、溥儀が亡くなった翌年に次のように述べている。

道慈〔道院での修養と紅卍字会での慈善活動を指す…引用者〕に精進すれば三代五代前の先祖が救われ三代五代後の子孫迄に福慶を蒙ると云われますが、昨年九月十七日北京で帰幽された清朝宣統皇帝（旧満洲国康德皇帝）は満洲国帝位御在任中、世界紅卍字会満洲国総会の一修方〔道院の信徒を指す…引用者〕として道名を「浩然」と賜り道慈に尽力された功德により九代の先祖が救われたと云うことは有名な話であります〔…〕⁶⁸

溥儀が道院・紅卍字会の活動を支援していたことに関しては、これを裏付ける記事が大本教の機関紙である人類愛善新聞にも掲載されている。それは一九三四年一月一三日付の記事であるが、そこには「満洲国

執政溥儀氏はこのたび〔…〕支那貧民救済を思ひ立ち、其の資金として北平の世界紅卍字会に対して一万円を下賜されたが、〔…〕その外近時著るしく疲弊の高まった陝西省救済のため二万八千円、農村復興費二万円、合計四万八千円の巨費を下賜し、ひろく各地に亘って救済慈善事業を起して居る⁶⁹」と報じられている。

おわりに

最後に林出がどのような晩年を過ごしたのか述べておきたい。

林出が極秘裡に外務省へ送っていた秘密文書が存在が関東軍に露見すると、林出の運命にも転機がやってきた。一九三八年一月一日、満洲国宮内府大臣から正式に「宮内府行走」の名義をとり消す辞令が林出に出された⁷⁰。林出は家族と共に一九三八年四月に新京を発ち、故郷の和歌山県御坊市の実家に戻った。しかし、その直後の四月二八日に再び外務省から中華民国在勤の命を受け、翌月に北京へ向けて和歌山を発った。

北京での林出は、表立った外交官活動ではなく、日本軍と中国人との間に入って裏面で宣撫活動を行う特殊な任務に従事した。これは、中国人への理解が深かった林出の得意とする分野でもあった。やがて一九四一年三月、中国駐在の日本大使館参事官に任命されたが、発令の直後に依願免官し、三〇年におよぶ外交官生活に終止符を打った。この時、林出は五九歳であった。その後は、上海の母校・東亜同文書院大学の招きで学生監をつとめ、一九四三年からは宮内省式部職御用掛として戦後の一九四八年まで、昭和天皇の中国語通訳として宮中に仕えた⁷¹。

戦後、一九四八年に再び故郷の和歌山に戻ってから、林出は信仰生活に没頭する晩年を送った。青年時代から信じてきた観音信仰を心の支えとしながら、日本における道院・紅卍字会の指導者として活動した（表

2参照)。一九三五年の第二次大本弾圧事件の後、元大本教信者で道院・紅卍字会の会員でもあった小田秀人や大嶋豊らによって世界紅卍字会後援会が設立されたが、林出もその活動を指導し支援した。

また林出は、一九四九（昭和二四）年に元大本教信者の中野与之助が設立した三五教あなないに関わりながら、日本における道院・紅卍字会の復興に尽力した。一九五四年に日本総院及び世界紅卍字会日本総会を設立するための日本総院会籌備処が設立されると、林出が初代処長に任命された。また一九六二年に社団法人日本紅卍字会が正式に設立された。初代会長は大嶋豊が就任したが、林出は名誉会長の一人に就任している。こうして道院・紅卍字会の指導をしながら、自らも道院の修養に精進する信仰生活を送った。そして、かつて通訳として仕えた溥儀が一九六七年に六一歳で亡くなると、その三年後の一九七〇（昭和四五）年に林出はその後を追うかのように八八歳でこの世を去った。

表2：道院・世界紅卍字会における林出賢次郎の活動

年	年齢	事項
1923	41	世界紅卍字会中華総会（日本震災賑濟処）買付江蘇米 28 万斤を日本に輸送、関東大震災罹災民救済に尽力。南京道院幹部で南京弁護士会長の陶道開の導きで、道院に求修し、道名「尋賢」を賜る。
1933	51	満洲国への転勤後、道院・紅卍字会の活動に尽力
1935	53	朝鮮の京城に設けられた朝鮮道院（朝鮮主会）の道慈統監に就任
1937	55	世界紅卍字会満洲国総会において「宗主」の称号が授けられ、満洲国総会首席維護会長に任命される。
1949 ～ 1953	67 ～ 71	清水市にある三五教の招きにより、同本部顧問として道院・紅卍字会を宣布する。
1952	70	台湾流通道慈統監、日本総院会籌備処聯洽専員
1954	73	日本総院会籌備処処長
1959	77	同総務部主任兼任
1959	77	道慈副統監兼日本総院会籌備処名誉処長
1960	78	世界紅卍字会日本総会建築委員会顧問、世界紅卍字会日本総会理事
1962	80	社団法人日本紅卍字会名誉会長、日本総院維護統掌
1964	82	社団法人日本紅卍字会会長
1965	83	10月28日カヨ夫人（道名：旭涵）71歳にて死去、道院より「虚涵菩薩」の果位を賜る。
1970	88	11月16日死去、道院より「勤承真君」の果位を賜る。

（典拠：「尋賢林出賢次郎先生、略年譜」『日本卍字月刊』第14巻第12号、昭和45年12月10日、9～10頁。前掲「林出賢次郎小史」『東方君子：尋賢林出賢次郎翁を偲ぶ草々』183～193頁）

注

- ① 拙稿「大本教と道院・紅十字会との提携―宗教連合運動に内包された政治的含意」(『立命館文学』第六六七号、二〇二〇年三月)、拙稿「満洲事変における大本教の宣教活動―道院・紅十字会との提携を中心に」(『立命館文学』第六七三号、二〇二一年三月)を参照。
- ② 林出賢次郎が大本教と道院・紅十字会との提携を仲介したことに關しては、孫江『近代中国の宗教・結社と権力』(汲古書院、二〇一二年、七九～八五頁)と、孫江「地震の宗教学」(武内房司編『越境する近代東アジアの民衆宗教』明石書店、二〇一一年、八四～八九頁)で論じられている。
- ③ 日野強の名前である「強」は、戸籍上「つとむ」となっている。しかし、彼自身や中国で活躍した時代には一般に「きょう」と称されていた。また、王仁三郎は「つよし」と読んでおり、日野はこれも認めていた。よほどあらたまったときでないかと、つとむとはいわなかったという(金子民雄『中央アジアに入った日本人』中央公論社、一九九二年、四五―頁)。
- ④ 日野強の生涯については、以下を参照した。岡田英弘「解説」(日野強『伊犁紀行』芙蓉書房、一九七五年復刻版、二一〇～二二二頁)、葛生能久『東亜先覚志士記伝』下巻(黒龍会出版部、一九三六年、七一四～五頁)、出口京太郎『巨人出口王仁三郎』(天声社、二〇〇一年)。
- ⑤ 金子民雄、前掲『中央アジアに入った日本人』四四五頁。
- ⑥ 「陸軍省派遣留学之分／陸軍砲兵少佐石坂善次郎露国領浦潮徳へ陸軍歩兵大尉日野強韓国義州へ私費留学之件」明治三六年二月(アジア歴史資料センター：Ref:B16080417700、外務省外史資料館)。
- ⑦ 金子民雄、前掲『中央アジアに入った日本人』四四七頁。
- ⑧ 「歩兵少佐、日野強、勲績明細書」(アジア歴史資料センター：Ref:C06041124300、防衛省防衛研究所)。
- ⑨ 本書は陸軍省大本営陸軍幕僚から、明治三八年三月に『北韓兵要地誌』として編纂されたが(アジア歴史資料センター：Ref:C13070020900、防衛省防衛研究所)、同じ内容のものが同年七月に『北関兵要地誌』として出ている(Ref:C13070025600)。本書の「目次」をみると、「地勢、山林、河川、港湾、住民地、氣候附衛生、産業、運輸、地方制度附、辺境兵備、
- 辺境警察、民情、教育、宗教、通貨、交通路、結論」となっており、沿道各地戸数物資一覧表、各郡戸口一覧表、各郡物産一覧表、各郡度量衡一覧表、交通図などの図表のほか、韓国沿道誌第二巻、咸鏡道偵察報告書類、咸鏡道事情、北韓兵要地誌(露国参謀中佐「バイオフ」著近衛師団参謀訳)が付されている。
- ⑩ 「凡例」『満洲土語案内』明治三七年三月(アジア歴史資料センター：Ref:C1311053800、防衛省防衛研究所)。
- ⑪ 「陸軍歩兵少佐日野強」『勲勞確證書等控綴』明治三七年五月以降、大本営陸軍副官(アジア歴史資料センター：Ref:C06041015000、防衛省防衛研究所)。
- ⑫ 日野強『伊犁紀行』(芙蓉書房、一九七三年覆刻版、一頁)に「明治三十九年七月下旬、予はその筋より新疆視察の内命を受けた」と記されている。
- ⑬ 公刊された日野の『伊犁紀行』にはこの部分があぶかれているが、日野家に所蔵されている『新疆旅行報告、附図附録』(全三冊、草稿本、一九〇八年)にはこのことが書かれている(金子民雄、前掲『中央アジアに入った日本人』二八五頁)。
- ⑭ この時の出会いについては、日野強、前掲『伊犁紀行』(一五三頁)の第一部「日誌の部」に記されている。
- ⑮ 日野強、前掲『伊犁紀行』一六頁。
- ⑯ 金子民雄、前掲『中央アジアに入った日本人』四四八頁。
- ⑰ 「参謀本部歴史」大正二年六月(アジア歴史資料センター：Ref:C15120048300、防衛省防衛研究所)。これに關して、出口京太郎は「偕行社で講演中に上官の立花大将とけんかをして軍をやめてしまった」と述べている(前掲『巨人出口王仁三郎』二二七頁)。
- ⑱ 青島民政署『会社一覧表』大正一〇年四月(アジア歴史資料センター：Ref:B07090747500、外務省外史資料館)をみると、「商号：青島街詰製造株式会社青島支店、代表者：日野強、本店所在地：同、事業別：牛肉販売業、資本金：拾万円、払込額：全額、支店設置年月日：大正五年一月六日」と記されている。
- ⑲ 出口京太郎、前掲『巨人出口王仁三郎』二二八頁。

- ⑳ 金子民雄、前掲『中央アジアに入った日本人』四五〇頁。彼の墓所はいま綾部にある。
- ㉑ 葛生能久、前掲『東亜先覚志士記伝』下巻(七一五頁)の「日野強」の項目を参照。
- ㉒ 出口京太郎、前掲『巨人口王仁三郎』二二九頁。
- ㉓ 林出賢次郎の経歴については、中田整一『満州国皇帝の秘録』ラストエンペラーと「厳秘会見録」の謎』(幻戯書房、二〇〇五年)と、林出翁をしのぶ会編集兼発行『東方君子・尋賢林出賢次郎翁を偲ぶ草々』(一九七三年)を参照した。
- ㉔ この時の経緯は以下に詳しい。日野晃『東亜同文書院と建学の精神』(平泉澄監修『歴史残花(五)』時事通信社、一九七一年、三二二頁)、藤田佳久『東亜同文書院・中国大調査旅行の研究』(大明堂、二〇〇〇年)、勝木言一郎『林出賢次郎と波多野養作による西域調査』(『アジア遊学』第三二号、勉誠出版、二〇〇一年一〇月)、『東亜同文書院大学史』(滬友会、一九五五年、三七三～五頁)。
- ㉕ 林出賢次郎「砂漠の果てに使用して：新疆省伊犁(イリ) 地方視察復命書より」(『論争』第二二号、一九六三年一月)を参照。本稿は「新疆省伊犁地方視察復命書」と、林出が昭和一九四二(一九四二)年に北京の日本大使館において外務省職員に講演した旅行談とを参考にして、林出が行った明治三八年七月から四〇年五月までの第一回伊犁旅行の概要を記述したものである(同書、一〇九頁)。
- ㉖ 長澤和俊『日本人の冒険と探検』(白水社 一九九八年)に、その行程が記されている。
- ㉗ 林出賢次郎、前掲「砂漠の果てに使用して」一一二頁。
- ㉘ 同右、一一六頁。
- ㉙ 日野晃、前掲「東亜同文書院と建学の精神」三二六頁。
- ㉚ 同右、三二七～八頁。
- ㉛ 林出賢次郎、前掲「砂漠の果てに使用して」一一二頁。林出賢次郎「尋賢回顧録(その一三) 二・トルキスタン人の忠僕―天外万里の異境で日野強陸軍少佐と邂逅」(『日本中会月刊』第九卷第九号、昭和四〇年九月一日、八頁)を参照。なお、日野は林出に会って新疆事情を聞くつもりで

あったところ、蘭州での風聞で林出は別路で帰国したと知り、なかばあきらめていた時に林出に出会ったとされている(日野晃、前掲「東亜同文書院と建学の精神」三二八頁)。

- ㉜ 林出賢次郎『清国新疆省伊犁地方視察復命書』外務省政務局印刷、明治四〇年一〇月(アジア歴史資料センター:Ref:B02130203900、外務省外交史料館)。本書は「伊犁之部」「塔爾巴哈台之部」「結論」の三部に分れ、別途に新疆ウルムチより伊犁に至るまでの里程表および旅行日程が付されている。内容は非常に具体的で、すべてが体験によって書かれた貴重な資料である。「人種風俗及宗教」の条では各民族の生活・宗教に鋭い観察が加えられている。長沢和俊「林出賢次郎『伊犁報告書』を読んで」(林出賢次郎、前掲「砂漠の果てに使用して」一二五頁)。その他、明治四〇年六月二九日に東京地学協会例会で行った講演の内容を記録した、「清国新疆省旅行談」(『地学雑誌』第二〇巻第一―二号、一九〇八年)でも、新疆旅行の体験が記されている。

㉝ 勝木言一郎、前掲「林出賢次郎と波多野養作による西域調査」四六～八頁。

- ㉞ 片岡一忠編『新疆省郷土志三十種』林出賢次郎将来(中国文献研究会、一九八六年)、片岡一忠「林出賢次郎将来新疆省郷土志について―新疆省地方志の現存状況に関連して」(『歴史研究』第一五号、大阪教育大学歴史学研究室、一九七八年三月、八〇頁)参照。

㉟ 日野巖氏による証言。金子民雄、前掲『中央アジアに入った日本人』一九二～三・二五三頁。三三一～二頁。

- ㊱ 『人類愛善新聞』一九三二年四月三日号、第四面「兵乱の上海を脱れ来て、粒々辛苦の結晶を残し平和をねがふ避難民、林出上海総領事夫人は語る」。「尋賢林出賢次郎先生略年譜」『日本中会月刊』第一四卷第一二号、一九七〇年一二月、九頁。

㊲ 綾部地明生「特筆すべき世界紅十字会中華総代表の参綾に就いて」『神の国』一九二三年一月一〇日号、五一頁。また、外務省の資料にも「大本取締上西新助ト親戚関係アリ」と記されている。機密第七八九七号、高警第一一四八「大本教二関スル件」大正二二年一月一〇日、発信者：京都府知事池松時和、内務大臣子爵後藤新平他宛(アジア歴史資料センター)。

- Ref. B12081614200、外務省外交史料館)。
- ③⑧ 林出賢次郎(尋賢)「正会渡日の回想」(『東瀛道慈月刊』第六卷第一号、一九六二年一月、七〜八頁)に当時の様子が詳しく記されている。
- ③⑨ 送第一〇二号「世界紅十字会中華總會ヨリ震災救恤米二千担送附ニ関スル件」大正一二年一〇月八日、発信者：在南京領事林出賢次郎、受信者：外務大臣男爵伊集院彦吉(アジア歴史資料センター：Ref. B12081614200、外務省外交史料館)。
- ④⑩ 右報告書に同送されている「在南京領事館林出賢次郎から日本外務省出淵局長宛書簡」には「江蘇米二十石」と記されている。
- ④⑪ 前掲、送第一〇二号「世界紅十字会中華總會ヨリ震災救恤米二千担送附ニ関スル件」。
- ④⑫ 「在南京領事官林出賢次郎から日本外務省出淵局長宛書簡」(前掲、送第一〇二号「世界紅十字会中華總會ヨリ震災救恤米二千担送附ニ関スル件」に所収)。なお、文意を把握しやすくするために引用者が句読点を付した(以下、同様)。
- ④⑬ 「人類愛善新聞」一九三〇年一月一三日号、第二面「紅十字会幹部亀岡に永住、東洋平和の促進を期す為」、『人類愛善新聞』一九三一年一月一三日号、第二面「紅十字会の代表者侯延爽氏済南へ帰る」などの記事で、侯延爽の経歴が記されている。
- ④⑭ 大本七十年史編纂会『大本七十年史』上巻、一九六四年、三四三頁。
- ④⑮ 「紅十字会南京分会の袁善浄が北京紅十字会總會へ宛てた手紙」による。孫江、前掲『近代中国の宗教・結社と権力』八二〜三頁。
- ④⑯ 機密送第一三号「紅十字会調査ニ関スル件」大正一三年三月一九日、発信者：在南京領事林出賢次郎、受信者：外務大臣男爵松井慶四郎(アジア歴史資料センター：Ref. B12081614300、外務省外交史料館)。
- ④⑰ 兵外発秘第一四一一号「北京世界紅十字会及大本教授携布教計画ニ関スル件」大正一二年一〇月一〇日、発信者：兵庫県知事平塚広義、受信者：内部大臣子爵後藤新平他(アジア歴史資料センター：Ref. B12081614200、外務省外交史料館)。
- ④⑱ 「神機の動き」「満洲主会」「真如の光」昭和九年一月一〇・一七日合併号、一二頁。
- ④⑲ 小高秀雄「上海に慰問して」『真如の光』一九三二年四月五日号、二〇〜三頁。
- ⑤① 「道院中会彙報」(『真如能光』昭和五年一〇月二五日号、三四頁・三八頁)には、南葛道院、富士見道院、荏原道院の神位取扱者として東島威之吉の名前がある。
- ⑤② 小高秀雄「上海に慰問して」『真如の光』一九三二年四月二五日号、一五〜七頁。
- ⑤③ 小高秀雄「上海に慰問して」『真如の光』一九三二年五月五日号、二一〜四頁。
- ⑤④ 「神機の動き」「満洲主会」(『真如の光』昭和七年九月二五日号、五六頁)。
- ⑤⑤ 一月四日付「人類愛善会人事」(『真如の光』一九三五年一月二五日号、二〇頁)。
- ⑤⑥ 中田整一、前掲『満洲国皇帝の秘録』二四頁。
- ⑤⑦ 同右、二七頁。
- ⑤⑧ 公機密第一五九二号「支那語加俸ニ関スル件」昭和一一年九月一五日、発信者：在満洲国特命全權大使植田謙吉、受信者：外務大臣有田八郎(アジア歴史資料センター：Ref. B14091183700、外務省外交史料館)。
- ⑤⑨ NHK「ドキュメント昭和」取材班「ドキュメント昭和⑦：皇帝の密約」角川書店、一九八七年、二四頁。
- ⑤⑩ 林出賢次郎「扈從訪日恭紀」満洲帝国國務院總務庁情報処、一九三六年初版、一九三八年改訂再版。本書は同年四月二日に出発してから、四月二七日に回鑾を發する(回鑾訓民の渙發)までの日記である。また、扈從員名簿と接伴員名簿が掲載されている。
- ⑥① 満洲帝国國務院總務庁長・大達茂雄(林出賢次郎、前掲『扈從訪日恭紀』[序文])。
- ⑥② 中田整一「愛新覺羅溥儀」『歴史読本』第五四卷第九号(通号八四三号)、二〇〇九年九月、一二二頁。
- ⑥③ 前掲、『ドキュメント昭和⑦：皇帝の密約』一八五頁。
- ⑥④ 中田整一「満洲国皇帝の秘録」一九頁・二七頁。これら文書資料のうち、「厳秘会見録」のほか、定期謁見・臨時拝謁、宮内府日誌、宮中・皇

上関係、御進講・言上など、在満時代の公的資料は外務省外交史料館に寄贈された。そのほか日記などの資料は、国会図書館の憲政資料室に所蔵され、『林出賢次郎関係文書』（マイクロフィルム版全一〇巻、雄松堂書店、二〇〇〇年）として閲覧可能である。

⑥4 「紅卍字会の熱河方面視察員に対しての関東軍の通行証を送り：」（「神機の動き」「華北通信」「真如の光」一九三三年八月三日号、一七頁）。

⑥5 澤崎堅造「世界紅卍字会について」『東亜人文学報』第二卷第三号、京都帝国大学人文科学研究所、一九四二年二月、一五六頁。

⑥6 林出賢次郎（尋賢）「尋賢回顧録（その九）…私の道服について」『日本卍字月刊』第八卷第七・八号、昭和三九年九・一〇月、一〇〇～一頁。

⑥7 林出賢次郎「尋賢回顧録（その一〇）…鯉料理の妙味―満州国皇帝の御

知遇をめぐって」『日本卍字月刊』第九卷第一号、昭和四〇年一月一〇日、八頁。

⑥8 林出賢次郎（尋賢）「日本院会の歩みと将来」（『日本卍字月刊』第二二卷第一号、昭和四三年一月一〇日、一〇頁）。

⑥9 『人類愛善新聞』昭和九年一月二三日号、第三面「支那貧民層に春返る、執政救恤費を下賜、北平紅卍字会の救済事業」。

⑦0 中田整一、前掲『満州国皇帝の秘録』三〇六頁。

⑦1 同右、三二六頁。

（本学文学部教授）